

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 () 平成18年度:38-41.

造血幹細胞移植を受ける患者の家族への看護：思いやニーズに沿った介入を目指して

加藤, 美香 ; 泉水, 典子 ; 佐藤, 玲奈 ; 川村, 綾

造血幹細胞移植を受ける患者の家族への看護 ～思いやニーズに沿った介入を目指して～

5 階西ナーステーション ○加藤 美香、泉水 典子、佐藤 玲奈、川村 綾

はじめに

当病棟では、造血器疾患を抱えた患者に対し造血幹細胞移植（以下移植とする）が行われている。移植を受ける患者は、移植前処置の副作用や免疫力の低下、長期に渡る入院生活や無菌室管理により体力が低下し、身体的・精神的に辛い状況におかれる。この辛い状況を乗り切るためには、家族の協力が必要不可欠である。しかし、その家族も患者の苦痛を目の当たりにするたびに、患者の辛さを感じ取り動揺する。このように移植とは患者を支える家族にとっても負担の大きい治療となっている。当病棟でもこれまでに移植患者と家族に関わってきたが、看護の対象が患者のみになってしまい、家族を含めた看護を十分に行えていなかったと考えた。そこで今回、患者が入院中家族はどのような思いで生活をしていたのか、また、どのような関わりを望んでいたのかを明らかにし、今後の看護援助の方向性を見出したので報告する。

I 研究目的

本研究は移植を受けた患者の家族の思いやニーズを明らかにし、今後の看護援助の方向性を見出すことを目的とする。

II 研究方法

1. 研究期間：2005年6月～9月
2. 研究対象：2004年4月～2005年4月までに当病棟で移植を受けた患者の家族8名。自家末梢血幹細胞移植（以下自家移植とする）・骨髄非破壊的移植（以下臍帯血ミニ移植とする）
3. 研究方法
 - 1) Nancy C. Molter の重症患者家族ニードを参考に独自の自記式質問紙（選択式・複数回答可、自由記載欄有り）を作成した。質問項目は、患者が入院中家族がどのような気持ちでいてどのように対処していたか、看護師へ望むことは何か、退院後の注意点でどのような情報提供を望んでいたかという内容とした。
 - 2) 電話で承諾された対象者にアンケートを送付し郵送で回収した。
 - 3) アンケートを集計し分析した。

4. 分析方法

自記式質問紙で得られたデータを単純集計した。

5. 倫理的配慮

得られた情報は個人を特定できないよう処理しプライバシーを保護することを説明した上で協力を依頼した。アンケートへの協力が得られない場合でも治療・看護上の不利益は生じないことを依頼文中に明記した。

III 結果

1. アンケート回収結果

質問紙を郵送した家族8名中、回収できたものは7名であり、有効回答率100%であった。

2. 対象の属性

- 1) 性別：男性3名、女性4名
- 2) 年齢：44歳から67歳、平均年齢56.6歳
- 3) 患者との関係性：全て配偶者であった
- 4) 移植の種類：自家移植6名、自家移植と臍帯血ミニ移植の両方1名

3. 患者が入院中、家族が抱えている思い

1) 無菌管理中

「治療が上手くいき元気に退院できるか心配だった」が5名と最も多く、「自分のことのようにとても落ち込んだ」が4名、「何もできないという無力感があった」が3名、「より一層家族の絆が深まった」「移植をしても再発するのではないかという不安があった」がそれぞれ2名であった。

2) 無菌管理後

「移植をしても再発するのではないかという不安があった」が6名と最も多く、「治療が上手くいき元気に退院できるか心配だった」「経済的な不安があった」がそれぞれ4名、「何もできないという無力感があった」「より一層家族の絆が深まった」がそれぞれ2名であった。

4. 患者が入院中、家族が抱いていた思いへの対処方法

「医療者へ相談」が3名と最も多く、「家族・親類へ相談」「友人へ相談」「患者に相談」がそれぞれ2名であった。

5. 患者が入院中、家族が看護師へ望むこと

1) 無菌管理中

「患者の身体的な状況を教えて欲しい」が5名と最も多く、「治療内容を教えて欲しい」が4名、「患者の訴えや気持ちを教えて欲しい」「医師との仲介をしてほしい」「モニター面会ではなく直接会えるようにして欲しい」がそれぞれ2名、「医療費についての情報が欲しい」が1名であった。

2) 無菌管理後

「今後（退院後）の注意点などの情報が欲しい」が4名と最も多く、「治療内容を教えて欲しい」「看護師のほうから積極的に声をかけて欲しい」がそれぞれ2名、「医療費についての情報が欲しい」が0名であった。

6. 退院後の注意点で、具体的に欲しかった情報

「移植後の起こりやすい病気などについて」が6名と最も多く、「食生活について」「熱や風邪をひいたときの対応について」がそれぞれ4名であった。

7. 記述式回答

「再発への不安や带状疱疹に罹患したこと、食生活について、市販薬を内服しても良いかどうか等」の記載があった。

〈表1 記述回答内容〉

不安	皮膚に一個の斑点が出ても白くなってもドキドキします。まだまだ毎日全身点検をおこなっています。でもいつもまた「再発」の日がくるのではと頭から離れません。
病気	退院後带状疱疹になったのですが唇ヘルペスになり水泡が出はじめの時は食欲がなくなり電話での医大の先生とのやりとりは心配でした。
	半年経ってから带状疱疹になりひどい目に遭いました。
市販薬	市販の胃腸薬等を飲ませていいのか迷っている。症状にもよりますが、市販の薬を飲んででも良いかアドバイスを欲しい。
食事	サラダや果物、刺身が好物で何を食べ栄養をとらせるかが問題でした。少しでも退院する前に献立表みたいなものがあつたらなあと思いました。
面会	ナースステーションでのモニターの面会にはとまどいました。一番嫌でした。気持ちも伝えることができないし、顔色等もあれでは見極められません。

IV 考察

移植を受けた患者の家族は、患者が無菌管理中には治療が上手くいくかどうかという思いが最も上位を占めていた。また、家族が看護師に望んでいる情報も身体的な状況や治療内容といった患者の病状を心配する内容のものが上位を占めており、これらのことから家族は患者の身体的なことを心配し、誰よりも治療の成功を祈っていることがわかる。Nancy C. Molterの重症患者家族ニードで、家族にとって重要であると考えられていることの上位には、「希望があること」「予後を知ること」「患者の経過に関する事実を知ること」が挙がっている。今回のアンケートでも、家族は患者の身体的状況や治療内容について情報を得たいというニーズが上位となっており、Nancy C. Molterの重症患者家族ニードと同様の結果となっている。当病棟では、無菌管理中はナースステーション内のモニター面会のみになるため、直接患者と接することができない。この状況について記述記載のなかに『モニター面会では気持ちも伝えられず顔色等も見極められない』という意見があり、患者を心配する家族にとっては、顔色や体調を把握しにくいモニター面会では、より一層不安を強くしていたと考えられる。家族が相談相手に「医療者に相談する」の回答が上位にきたことから、身体的状況を一番良く知っている医療者に相談し、そこから情報を得ようとしていると考えられ、看護師は、患者の情報を頻回に家族に提供していくことが重要である。さらに家族は、患者が入院中自分のことのようにとても落ち込んでいるという方が多かった。治療を受ける患者のみならず、それを支える家族にとっても移植は辛い治療となっており、患者同様家族自身も悩み落ち込んでいることが確認できた。また、家族の中には何もしてあげられないという無力感を感じて生活を送っていた方も多かった。無菌室に隔離となることで、家族は、そばにいてあげられない、何もしてあげられないと特に感じるのではないかと考える。波多野ら¹⁾は「患者だけではなく家族もまた、患者の疾病・入院により多かれ少なかれ、不安を感じ、精神的脅威にさらされる」と述べている。このように、家族も悩み落ち込んでいること、無力感を感じていることなどを理解したうえで接し、積極的に看護師側からの声かけや家族も治療に参加していることを認識できるような関わりを行っていくことが重要になる。

無菌管理後となった際に家族が抱える思いの上位を占めていたのは再発への不安であった。記述記載の中にも『現在（退院後）も月に一回病院に通っているが、皮膚に

一個の斑点が出てドキドキする。まだまだ全身点検をおこたらずしている。いつもまた「再発」の日がくるのではと頭から離れない。』という意見があった。移植を受けても再発の可能性はあるため、共に生活を送る家族は常に不安を抱いていたと考える。中村²⁾は、「治療の研究・開発は進展しているもののいまだに侵襲が大きく、しかも効果が不確実で、転移や再発を免れられないことも少なくない。そのようななかで、患者のみならず家族もまた期待と不安の入り混じった状態で、緊張を引きずっている」と述べている。看護師は、移植が終わり一安心と思うのではなく、常に家族は不安を抱いていることを念頭に入れて関わっていくことが必要になる。

今回の調査では、無菌管理中・無菌管理後それぞれの状況で抱えている思いの内容が違うという結果がでた。この結果を受け、看護師は、状況によって変化する家族の思いを理解し、関わっていくことが必要である。

また、家族が看護師に望むこととして上位にあがったことは、退院後の注意点についての情報提供であった。退院後の注意点について家族が欲しいと思っている情報は、「移植後に起こりやすい病気の情報」が最も多かった。記述記載の中にも退院後帯状疱疹になって困ったという内容があり、また実際に病棟へ帯状疱疹についての問い合わせの電話がきたこともあった。パンフレットを用いた退院時指導を行っている状況でも、このような意見が多く得られたということから、現在使用しているパンフレットの内容では十分な情報提供ができていなかったと考える。また、「食生活について」や「熱や風邪をひいたときの対応」についても強く情報提供を求めていることから、再度パンフレットの内容、特に帯状疱疹の症状や食生活、市販薬についての説明を医師に確認しながらより具体的なものにしていき、退院時指導を充実させていくことが必要である。

さらに経済的な不安を抱いていた家族も多かった。移植治療は前処置の抗癌剤や無菌管理という特殊な環境、そして輸血などを使用する頻度が高いことから経済的な不安が増大すると考えられる。しかし、今回のアンケートでは看護師に望むこととして医療費の情報が欲しいとしているのは下位であった。これは、早期からソーシャルワーカーに連絡し、連携をとって医療費の情報を提供していたためと考えられ、今後も継続して行っていく必要がある。

鈴木ら³⁾は「家族を患者の介護者としてのみ捉えるのではなく、まず、患者と共に悩んでいる存在、つまり看護の対象として捉え直し、家族全体から問題解決に向け

て取り組む。このような家族看護によって、はじめて真の意味で患者の療養生活を支えることができるのである」と述べている。このように、移植を受けた患者の家族に対し私たちは、まず家族も共に悩んでいる事を理解し、今回の研究で明らかとなった家族のニーズを充足できるような情報提供をしていくことが必要と考える。また、患者と共に病気と闘っている家族の思いを理解、そして支持していくよう関わること、さらに、家族が支えられていると実感できるよう、ねぎらいの言葉かけや思いを傾聴していくことが重要であると考えられる。

V 結論

1. 家族は、無菌管理中は直接患者と面会できないため、身体的な情報や治療に関する情報を求めている。看護師は、日々の患者の情報を家族に提供していくことが重要である。
2. 家族は、患者の病状の心配や無力感を抱いて生活している方が多かった。看護師は、家族も治療へ参加していると認識できるような関わりが重要である。
3. 家族は、退院後の注意点についての情報を強く求めており、現在のパンフレットを見直し、より充実した退院時指導を行う必要がある。

おわりに

私たちは今回の研究で、家族看護の重要性を改めて認識することができた。今後は患者だけではなく、得られた結果を生かして家族に目を向けた看護をしていきたい。

引用文献

- 1) 波多野梗子、村田恵子：患者・家族への援助と看護婦の役割, 38, 医学書院, 1985.
- 2) 中村めぐみ：臨床看護, 22 (10), 1512-1513, 1996.
- 3) 鈴木和子、渡辺裕子：事例に学ぶ家族看護学—家族看護過程の展開— (第2版), 6, 廣川書店, 2001.

参考文献

- 1) 本郷允彦：がん患者の家族ケア, がん看護, 9 (4), 2004.
- 2) 小倉一春：看護技術, 51 (6), 2005.
- 3) 森山美知子：ファミリーナーシングプラクティス, 2001.
- 4) 野嶋佐由美、長谷川恒夫：家族看護学 理論とアセスメント, へるす出版, 1993.
- 5) 市川裕美子：看護技術, 48 (11), メヂカルフレンド

- ド社, 2002.
- 6) Nancy C. Molter (常塚広美) : 重症患者家族のニーズ, 看護技術 30 (8), 137-143, 1984.
- 7) 源内しの 他 : 第 35 回日本看護学会論文集- 成人看護Ⅱ-, 日本看護協会出版会, 237-239, 2004.